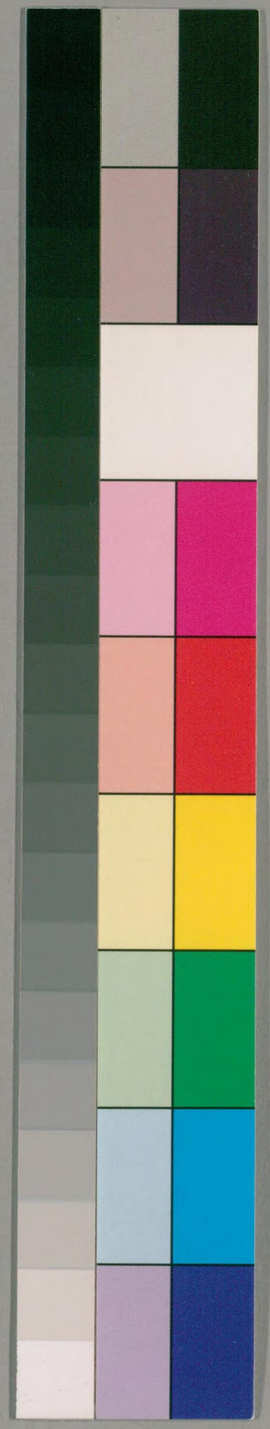
蓁々翁句集

863
94



国立国会図書館　タイトル『蓁々翁句集』　請求記号 863-94

ガラス使用

蓁〻翁句集

蔦 舘 蔵

蓁〻翁句集

門人 舘 刻

863-94

蓁〻翁發句集序

夫物感情遷情緣物動、雖諧則冷煖自知、而己人自修得而到艾微、或曰三法四法、或曰七名八體、是俳諧之通教也、豈足以語其秘妙哉、蔦師正風再傳、素九翁充盛、子名自名家、蓁翁其末第也、翁年七九、翁授名素芫、曰我門狡児也、一日遊于白

国立国会図書館　タイトル『蓁々翁句集』　請求記号 863-94

ガラス使用

山下、聞獅子門之口訣、庵忽自通、文化末、
遇无物老人、秘劫圓備、更名蓁々、號桃葉
菴、又號夕可菴、文政九年、列山居士歿、翁
嗣其日菴、為葛門貫主、大唱虛實遠敷諷
諭、遥飡風德、而来者多、我九翁之際、於斯
為盛矣、天保十四年癸卯翁寢疾、後九月十三
日易簀、明年卒年、年六十八、葬四谷本性寺、

私諡欽定頌宗正督日隆、翁著書數萬、而
朝啄夕吟、逞情性之句、多慮百千、彌江等、
竊就題詠之類、撰其十一、約為二卷、名蓁
々翁發句集、以授同好之士、夫物與情会
二人能自修自得、而其秘劫不可語焉、此
集也庶幾士雖未能修得如翁、亦先使其
深指知味、是吾之志也、弘化二年春二月

国立国会図書館　タイトル『蓁々翁句集』　請求記号 863-94
ガラス使用

蓁々翁句集序

文祥、葛門兼統九世、馬場錦江識筆蓮池

秋蝉燈

弘化二年初秋女性寺のこゝろ
蓁翁の廟前を過ぐる漢詩の
序訓り多き昭和

秋蝉燈

秋の蝉さそ
名もきさる思ひこの那

蓁〳〵翁

秋の日のひねもす
秋の声聞きけい来ぬる
師蓁翁乃
ん
ほりて哀事りされ

秋擁燈城石雪て作り朝茶を煎ん別ホ
求む雨ふ〳〵添ふて共秋せふ
さく燈の四方ホ志るさ水ふ
まつ〳〵ねるまて女壻の志ふ
仮名の序ひら〳〵とうるほまる〳〵又別ホ
衾ホうち作る

乙巳 桐月 二世 素法翁自人誠

蓁々翁發句集上

春之部

歳旦

漲き春や鴛帽子のろけ心
元日や早起ふる郎士の上
元日や五器より匂ふ花盛

見つゆホ不二の画賛

元日や艘ニもなりそふ先
年〳〵ホ老ゆれまも
三川の朝みつ〳〵漲る海老の及
年の内さまめる小空の常ホう

国立国会図書館　タイトル『蓁々翁句集』　請求記号 863-94
ガラス使用

きれ〳〵に似て松もる初日哉
その爲春惜む一声ほとゝぎす
鶯あらて春のまふさく花の春
奥本の休〳〵行〳〵雨代の麦
初夏や急ぐ旅の杖のうへも

筆具收巻終

門の松私あるまじ年もとり
世の中に町ふ伊達行松飾
僧正も加賀に世を忘つゝや
啼つゝや昌ふも松の加うけ
遺業や敲の処る人の哉

古稀賀

其歳も若一折の水うつし
永郎も脊の老や弓場始
宮對の袴序や祝ひ始
田作や我獨の年もよろこぶる福色加減
初子

鶯の狂ほ〳〵子の日の小松うち

若菜

若菜つむ野の猫も出てうろ〳〵
摘る氣やら陽もさやかに暮うるゝ
作ら痛い指ふ枝ふ川田芹うるゝ

武夫鏡開附箋冊

国立国会図書館　タイトル『蘇々翁句集』　請求記号 863-94
ガラス使用

未も漸く涯刻る冬籠
冬籠大雪も出ず里もまた
鶏杖 附雪四月
鶏杖やこうれい君も角ひ頭
誰るなよ雪四月の古風さは
佐保姫
佐保姫や花小袖も多少角ひ掛
若松 附松の芸
松若し誇の齢ひも是より枝
豆の形く具てもそる一松の芸
残雪 男小姓
緑して形能でより松の苗

梅 附紅梅
梅ほし人の碑く女歌の芸
去年より北前知る梅や梅の芸
誇為く供ぬも佐まて梅見うそ
梅さくや厠の志つき新らしき
梅ほのく窮く 謝ふ羽根ぬけ
白梅や月の影ハのく次もと
志く梅や次第く小月の満
青月ハ次第小さくく梅白し
闇小生れる梅匂ふる硯うそ
志く梅や軸の青さも通る
梅さくや能く志て鞭ふきら佐ぬし

おき交る柳に梅の花
綿合も兄と休らひ梅の花
　画賛
老木にも貫禄ゆかし梅の木
紅梅や羽ふつほこの美しき
　柳
思ふ程無ねくせ毛も柳哉
糸柳琴引く松ぶ交りけり
風の日は水汲ながら柳哉
考こそ懐慮もあれ柳の那
行袖に水ふひろがて柳哉
川業ふ流れて史ふ柳哉

先着む納屋干場の柳哉
西つまて和代押出ま柳哉
宮ふ無言て去年の昆木も柳哉
老木さへ実着ふして柳哉
　椿附椒
枝ふりの皆いけふくま椿哉
ま赤らてさわふ花ふる椿哉
日の柿のそらぬ熟ふ椿哉
是ふも深めぬとふり椒の雨
　木の芽
接穂木もふり面白し木の芽時
日没うみて云ふこと楠の木のめ哉

国立国会図書館　タイトル『蓁々翁句集』 請求記号 863-94

ガラス使用

楓やら木瓜やら赤し一垣の内

嘗

嘗や山家育も鄙も一羽烏

嘗や山路ふきくもる

奥附合執

白魚やさながら透通る

白魚や海ひろ〳〵と

白魚や浜の漁家の二寸程

手もすまず一早苗の鮓やそれ

若鮓やりかへしたる大根

老ひてなほ道具そろへて

若鮓や新酒

苔むせる石燈籠の

山椒は皮も実も

白魚や一すくひ

若鮓や

猫の恋

逢ひきわめや恋の猫の

向合ふて声〳〵鳴や猫の恋

猫の恋先住猫も有りけり

猫の恋

晋解 附 琢解

萬軍の鼓乃木閤の雪解さ

雪解や奉さし挽ける新の下

陳とりや芝浜切る下駄足袋

国立国会図書館　タイトル『蓁々翁句集』　請求記号 863-94

ガラス使用

春雨 附春の雨

気石のこうきよう春の雨
思ふさま降て満つや春の雨
春雨や簀の透ひ出て杉の下
新道のぬり下駄多し春の雨
雨

餘寒

水汲て釈迦に手向ん餘寒哉
餘寒なほ手水に氷る朝哉

東風

東風ふくや竹の縄も動るみどり
さゞ波や東風や凍をぬくるの仇

秋月 附春の月

芙蓉向大江の水や秋の月
飼食て一つも捨ぬおや蜻蛉
御油まで送りの中や春の月
駅中うりてのほせる春の月
去年のごとく水ぬるむや春の月
秋月水に晴らぬ春也けり

人老忌

ひく船も老をや送る春の暮

西行忌

其像も墨絵成けり西行忌

国立国会図書館　タイトル『蓁々翁句集』　請求記号 863-94

ガラス使用

暖よ牛の葉うや毛も衣岸ゟ
鰊きそあれ松加減や温藥像
峯入や吉野の杉くゝ九折

二日発

ゟ病あるこのかく〳〵声や二日発

救入附出代

救入や仏歴も汗きと祢う言
救入先尽くや梨子地の煙草盆
出代や帯志免まで送入日

風中

賢ふるとゝ木ふ河りいろ北ほ
筆も希祝いのまやいろ北ほ

七

春の日附永き日

春の日や皆鉄さゝ〳〵磯童部
元結の照り欠引ゟ春日うゟ
松ゝ者〳〵宮ゝ淺草の春日うゟ
永き日や牛ふ鞍うゟ人の愈
永き日ゟ度〳〵ゟる松作て
道祝智くて土ゟの上ゟ春日ふ

春の竹附春耕

鉄物の角槌も青〳〵春の竿
竹ゟきそ〳〵若むゝきゟ野やさゝ方
法ゟ智〳〵畑の往ふ松葉ふ
刈ゟ打ゟる芝ふ地俵ゟ名ゟ

菜の花や布も洗ひ干大根と二世の契今もかはらず
歌ひ初め田も打ち返し弥や花五形ちる麦の好くて休しや苗の芽
打ち残し仮森の麦や芽の種
蒼世やよき毛鎖の麦不
立琴り風城いとふや
白兎園奉舎
春や今麦の根を踏も新ら
敲ひて又新らしや春の畑
雑子 附春の月
雑子あるや朝の心い馬の上

雑子けたゝ地震ひ静かに駒の足
雑魚の跳るもやせん静かの声
の静かと石冒尚りと申春の月
乙鳥
洲浜のなき日いむれる乙鳥ら
川渡ふ人ふ交りて乙鳥ら
宛許の巣と蔓延る乙鳥ら
乙鳥や風ふ声足の羽根を
雲雀
日上ふおけい麦ありて雲雀
空よりと声ゝ雲雀の羽かゝや
ふ別ふ降雨もなき雲雀ら

国立国会図書館　タイトル『蓁々翁句集』 請求記号 863-94
ガラス使用

春の雪

春の雪人机ゆゑもなかりけり

もる〻春雪のほとゝぎす成ふりぬ

朝寒や椒の枯木雀子や

蝶

蝶〻や何仮寝して麦の上

狩人の蝶又ゝ〻飛ぶ

起れとも思ふにあらぬ小蝶かな

野に虚一匹きえ行ぬ小蝶かな

蛙

日の柿小流立男行

蛙の子

海向と家のそこ〻ろ〻ゝ蛙かな

多度へ是去あき蛙哉

いと遠一畚の蛙の初蛙

誰か水汲のけし井筋を初蛙

中〻と声もおくての蛙かな

蛙子ゝ〻是の岩て月赤ゝ

蛙子ゝ〻尾ハ切て蛙かな

田螺 附ざこ虫

る紙入れ一銭ほろ〻田螺かな

豆鰒と煮んて売る寄居虫かな

雛

今様の袂ぬくもを揚屋の雛かな

雛さてさそ〳〵狩や狩衣
春の山枯枝高ふ声や春の山
春の山枯枝高ふ声や春の山
松又松の風情や春の山
春の山宮殿の色そ美なのら
青海も皆芝の秀そ弥生山
春の海俤川
見失ふ多毛も染や春の海
筏かも鯛も釣まし春の川
はまさ〳〵まし春ふ見ゑ汐春の川
花俤橋

春さ〳〵花の七百八十餘日和
梵論〳〵花掛ける笠見ゑ春
毛鑓ふ下戸の五つ〳〵ぬ花見ゑ
都次重さ〳〵も重ね〳〵汐
七ツ陽炎春ふ一重さくらゑ
志〳〵や揺ゑ春の月の春
多おらゑ科いなけれ〳〵揺ゑ春
籟ふ春蚊ふまで夜や朝さくら
雨俤ひ一ふ鞦〳〵玉〳〵夕揺
見下せ池も草社ぬ揺ゑ
籟ふちら〳〵おるの揺ゑ春

悼抱庵

苔寺や若木の花ふ嵐ふく

列山屋主翁まつたや十三年ふ

帚目ゆと甘露ふる也ー

月影や苔ふく水ー

花ふ来よ伽陵噸伽も多の内

歎冬附笈つゝー

山吹や枝垂桜ねて咲ー虫ふき

苔桃や皆作むすー

蓼の露ふるゝや苔の根

処ゑてふる雨ー白ゝし

ゐも香も仏くさゝや池丁ゑ

ゟ春

水にの琴ふるゝて去ゆく

加賀笠の桜の暗ふ多の春

灯ゝ花の空のほゝゑや時多

夏之部

首夏

淺〻と山も青うて卯花も清し
卯花垣も清し
編細小袖の古〻た袷うすう
子供等の先く蒸暑うて袷うすう
氣も落ち神の手製の新葉ざる
晒さるる小僧も汗ばんで新葉ざる

土を白き園もて
今年蒜のわく〻唇も赤き
薩伝の句〻も旬ふ新葉ざる

麦秋

古堂ふよき抱壺投　麦の秋
十王もつゝ倚〻りけり　麦の秋
冬史立机
實の糸をつけや忘れ草や今年麦
稲扱附夏の扱の月
みづ扱や返しもやらぬ桃紙
稲扱や喜べども絶えせぬ釜の音
夏の扱や河原小竹の下てする者糸
夏の扱や市ふ奥刻く人たのむ
椿抗の扱等〻り
かつを
夏の月

大四小寝の後すて　松奥ゟ

時多

時多　本かゝり時や雨運ゟ
聞んとて暦見る日やほゝまき次
櫛の茸の上もゝ時や時多
てらさん子されぬ宮や時多
虎杖ハ五尺ゟるまき公　郭
小坊主の耳のさゝやゝ子規
きゝ〳〵ゟ一日や蚊ゝも好多
鴻鵠も雨ゟ消ゝほゝまます
郭公愛宕の峯ハ雲の中
先も今朝耳の白帽や時多

灌佛附釈

頚人や一文片〳〵托佛生舎
灌佛や兜ゝ何〳〵何
朝〳〵の夏書の供や昔盃
五七五洗ゟ葉の夏書ゟゟ
陸琳詠のゟまるりるときて
閑四月蓮ゟるのハ中ゟ昇し

末附草

若葉さる山ゟ動〳〵や書の声
膝を足上る　槻の芽ゟ葉ゟゟ
見ゟら〳〵の海ゟ隠ゟ若葉ゟ

国立国会図書館　タイトル『蓁々翁句集』 請求記号 863-94
ガラス使用

平らかに雨我流まさや若楓
卯の花や去年の名木も植らるゝ
垂の如の中小林いきいきと
折釜葉より窮もつまり杜若
名川先ず咲て簪の名残う形
岩つゝじや下葉るゝ多秋昔の如
きれよりり作向ふ女子の蒼うか
念ひまて咲ても一琴の若
をひまて糸のまゝ筋や雪の下
朝さくも夕さくも船一桐の如
桐さくや何ぞかし井戸屋敷
列山里の嗣号城賀して

咲く捕も花の刃の牡丹の形
地獄まらぬ程かしけり牡丹かな
夕風かしけるも夏の柳うかな
みどり子の機嫌さらも午合歓の花
古風かしい柚の指折うゝゝゝ
尼三一風庭も行春
補杖う箱の一珍名百合の花
夕やけの朱をもかしけり百合の花
紅の如朝の一滴ゝ中を垂き
如蕾撫かしけるゝ紅の如
簾の花も雨かしけるゝ姿かな
蓮や寄の模様抽かしてある

国立国会図書館　タイトル『蓁々翁句集』　請求記号 863-94
ガラス使用

芹や志まぬ泪井の水の底
慈悲心鳥や甘皆しく小峡虔け
禁制の幕や水汲ふいさめぬ雫
散るまゝに杉小月すゝ庚申の茗
柚の花や幸度くうけする剣突
怨らめや柚盗人の花おこう
活られて手傳ふ一晃さゝや小石川
青梅やさまるくふ雨の科小行灯
岩躑躅の風も軽き萬葉ぶ
沢潟や水小乙鳥の雑法師
蓮植て一てらら水吟走り

手傳ひ秀てく蓮の巻葉哉
お嵐小凄き柳の黄ぬう糸
昼寝や白絣ぬきの紅箱の色
書初や生れつゐての癖かゝち
夏帷や地袋無こて石間ぶも
かい形くる簾小音阿夏の竹
碍や猿の隠ぬ草の
八重唐一致仕しく人の見ぶ
祖添やいもふ撓ぬる杖の先
砂利石小崖の雪や木下闇
先妻の念佛彼岸や木下闇
下やくや木の根彼岸ふ多の音

国立国会図書館　タイトル『蓁々翁句集』　請求記号 863-94
ガラス使用

青嵐

青嵐三の鐘の動きそめ
青嵐旅て梢の七つ三つ

若竹　附仏の子

若竹や月ホ林きき教法師
若竹や親ホ恋さをし――処心
仏の子や児の母の初のきひ
若竹の戯きや仏の桁よを

茄子

沙法師ホ花ホ去ま書て茄子よ
初茄子や筆へそ又切晴――ミ

端午

木ミ上ホ仏きへ
若元子の肩て仏きる
頸元ホ鬼若元しや
薬かる日や朝起ホ
榻ま赤武奥武師子
ま赤感る程ホ寝ま赤

帷子

帷子や児ま赤いろ
扨香
扨香や蕃月射る人の
うみ香や古人くれる

月宰

国立国会図書館　タイトル『蓁々翁句集』　請求記号 863-94
ガラス使用

蓑の衣小笠の　日ふる
田植唄青田

云はるゝ緑哉ちゝす田植ゑ
水音くれて新見ゑぬ青田かな
今下ゝ驚の打迎ふも青田かな

五月雨

五月雨やりあも捨てゐる作左文
五月雨や雲又雲の下ゆく
五月雨や山の容ゝ折るの音
五月雨や再び青むされ麦
雲板の研も絶て五月雨
蕎橋の苔小芽出り五月雨

五月雨や蚊ゐ〳〵ゝ磨耶の家

五月晴

奥山の蛭の呼や五月を走

画賛

五月晴富士の高根ハ鳥

山道の一里ハ牛一閑子
西東ともぬ木立や閑子
青蛙や眼ぬけられて閑子
ぬるゝ一羽の声ゝ思ひきり
何晴ぬ一羽の声ゝ子
雨のふゝ〳〵ゝ傾りの榊の鳥

国立国会図書館　タイトル『蓁々翁句集』　請求記号 863-94
ガラス使用

蝿

蝿や蚤や蚊も喰ひ殺し
蠅叩る音や雀も啄ひ殺し
蠅叩る音や雀も啄ひ殺し
蠅叩る音や雀も啄

青嶺や旅の投宿もち
生ぐちき餐う梅や梅の声
梶うちて生ぐらく行く奥の勝

蟬

神の樹へつくり蟬の空の時
おくれ蟬一つ多く森動きり
川せゞ一村立や蟬の声
蟬の声上野の杉へ蟬の声
礫打つ思ひの軒ホ蟬の声
峰走る蟬や走りて軒迷ふ

蛍

息合ひの光ふて行る蛍うお

簗の蛍草城うて絶叫
青帝の孤城。てゝまで蛍うお

蚊

蚊の声や夢のまでる硯に
群れる蚊や小唄城論の越来る
標ホ立て出戸近川蚊書り草
白ほその去留まよ女ふ
蚊を公や屋ホうつゝ
蚊打や風の来ぬ夏ホ
夏の蚊や千寿る墨汁住ホ

氷室

開くとの竹筒もとゝ氷室山

国立国会図書館　タイトル『蓁々翁句集』　請求記号 863-94
ガラス使用

不二詣 附夏山

列車より桜の雲や富士詣
松明の火の雲や夏の山
夏山や木の間ゆるる声も静む

盛夏

六月や雲井招くまで力なき
六月や殊更旅の朝の夏
六月や奥のまゝ迄のらひ水
風抜よ〳〵六月も三日ふり
虫干や古き書とも
夏の月も濁るまゝ好き

暑き日や昼寝の団扇の収まらず
田〳〵の細螺もぬるゝ昼寝うま
午堂の古机昼寝うま
蚤の居ぬまゝの床も涼しけれ
袖ぬらす泉も有り行く人
抱籠の猫も愛する浴の後
岩低る雲や泉の上
氷見ゆ氷ゆ氷ゆ雲の峰
夕立ふりふもとの雲の峰
水青や汗の消ゆる岩ひばり
冷水や月地移りて蝙也うま

祭

松葉も添水待りゆく祭かな
桟敷ゟ立来もたのむ祭かな
青梨程も晴ハあこのりを
祖國今や後醍ゟ去捨を
月待や赫奕として相さ次

夕立

夕立や今我擬ゟ吹おこる
多一阿夕立雲ゟまされゆく

納涼

すゞしさや鶺の峰尾ゟ吹込ゟ次
すゞしさや月ゟ吐ゟ浦の松
擬寶珠ゟ等ゟ勞田のすゞみ

川ゟ出て火城ゟ赤
焼火の影ゟ赤すゞみ

氏

一ゟ丸子ゟ抱のせり売
畑ゟすゞ赤いわうぬ赤ゟ桑
氏の季や青梅市の朝曇
千代や雨の多玄のいう渋り畑

心太

白糸ゟ角もとりてや心太

小鰺

鰺ゟやゟ小石ゟ敷の歩来てよす
砌ゟ青ゟつゝやゟ鰺の影ゟゟ

国立国会図書館　タイトル『蓁々翁句集』　請求記号 863-94
ガラス使用

扇

清き杖の用ゐも薄て扇うち

清水

柳蔭清水ふき綱ゆるまぬ

四つ手発ぬるまぬ蔵の清水ぶり

野の清水果て一樹有ふり

修目岩窪ふく〳〵清水うけ

山伏の見通し小せき清水うち

裏野 附夏の陰

旅人の盞のこす白き

家童子の奥裂く夏の渓辺かな

清秋

清秋川霧底も

見いやまさる流れぬ 虫拓れ

国立国会図書館　タイトル『蓁々翁句集』 請求記号 863-94

ガラス使用

蓁々翁發句集下

秋之部

初秋

初秋や鳴き出初の揖の音
今朝の秋童部の振心地よき
秋くれや湯さめ徳利の孔さえも
秋立や琴かきならす灰ふるひ
一葉 附ちる柳

空梅も苦ふ為来る一葉ふる
笹龍の糸もきれ〳〵
桐の葉や伊豫の湯桁と落ふり

国立国会図書館　タイトル『蓁々翁句集』　請求記号 863-94
ガラス使用

ちる柳すゝ青くして有あのら

七夕

星合や雲絶やらず終夜

七夕や歌書百ゟ妹ゟ許

七夕や琴ゟ筆ゟる扨宵の風

七夕や悩も拭ふる軒の糸

七夕やすゝ青の君ハ歳の春

星合ゟ昌ゟ妹背のさゝけの紙

棚立机斜ゟてるや天の川

机つき机ゟ礼ゟしさやう小袖

利根川ゟ十文字ゟり天の川

残暑

粟稗ゟ風ハ見ゝても残暑ゟゝ

村雲の不定なぬ残暑ゟゝ

秋風

秋風の菊ゟり早き香ゟゝ

菱喰ほゝ赤ゟ吹くや秋の風

稲妻

稲妻や眠ゟれハ山禄

いね打つゟや紅葉ゟ海の上

稲妻や積ゟく妻ゟくれを砕しき

いかだまや雲の裂け目の我不

稲妻や山伏ゟゝ取ゟ立

国立国会図書館　タイトル『蓁々翁句集』　請求記号 863-94
ガラス使用

稲妻や蓁居野を行く波斗馬

雪

朝風や雪ふき立てる波斗馬
海の雪磯辺も見えず吹成ふり
雪の香や分入る山の雨催ひ
吹送る雪や雲うしほ山の裾
露 附 あをうを

行燈の裾ふき上げて野路の露
草の香や上ほまでも又土ほまでも
言噂ふ声もそこ〳〵雪の宿
松明の行もくらがりや雪の中

花火

其辺ふ和堵〳〵花火この邪
草花 附 秋草

朝顔や強く干らび刻ぬ角き
朝臣の家離れ〳〵も其日限
降合や其日きりして散も女次
去やうふまれて咲し女帝花
海業の伊達如くも女帝花
顔さゞ月和ふ白し女帝花

葛葉の旧巣和ふる
翠ふて谷もい祝し毛蔦の花

賛

陰まれい翁も行り蔦の巻

国立国会図書館　タイトル『蓁々翁句集』　請求記号 863-94
ガラス使用

打ち寄る程ホ実の入る木の形
いと細き蔓我が為ホ
種瓢 再も行かんとし思ふかな
かまくら共撰集ける芭蕉うな
協も園城寺ホ久々ぬ芭蕉うホ
月許よ雪ふる如き 芭蕉ふる
賓ホ紅ホい川辺赤し一風仙花
宿引と並んで招くきの形
阪ホと共けいそよく 霰うホ

誰ホ秋老俄ホやき 芒の穂
月却ホい狩白妙や 曇根
雲間嵐根雪折ホ一翁

枩扇ホかそとも やまー 笠落
紅葉する葉福 を
砧うりホもろホ尾 笠ふ
添行の力もこう次 秋
世の中狭偏する砧の 菊
山寺や篝する 岩ホ上ホ 誓る
唐柔やそよのき 立ホい ホの音

甲斐ホ扇山ホ誓ホ二句

秋ホめ〳〵尾花ホ白ー 不二の裾
白波や雪吹まひ安房上総
祖祭附松待燈籠

入相もやまる 鐘や 祖むうへ

柳行や小僧もりあふ
掛待や打ㇾ水ㇾ
ㇾ
ㇾ

馬柵よそ添志川の虫のさゝ名
蓐さて掬ふや虫の声
枝豆詞て採てもも旅あり虫の声
蜱も云ふ川の声と成ぬ
蜱や今宵いかなる峠ぬ
水際の蚊籠ふ捨ふ捨峠く河原

月

名月や池もも水ハ不二ぬ雲
雪のおく思ふ比宵の月
檜垣の潮ふてるやふの月
牧の月採てみる馬放等ふ
名月や対牧の座も仏ゝさ浦

猪も月夜乃衆尾根ぶ並ふて五七疋
名月や鮮ぶまでしー鯛雲
名月や潮ふてるさゝ浦の波
旅宿の枝の志川名ふ月見ふ
七まで泊く雲の白ふ秋の月
我ふも奏拍志まきて月見ふ
要ふまきて発ぬ不我月乃ふ
晴ふのふも乃宿ふ今宵
栗林の子のふく成ぬ月の秋
恒河沙の数ふ仏ふり澄の月

亀の賛

草庵ふ仏の如ふりや今日の月

既出

ほのや景清の湯氣のまぐれ入

初汐

初汐や海雲のこゝろ〳〵む岩の端
初汐や修多羅ふくらする安房上総

角力

お角力や猪ほうり出す悪左衛
色臭最負ず強し　相撲　取

猪

猪のあとたのもしき匂ひ哉
恒河沙の玉の光や猪の夢
穂ぶ出て色ほの〳〵や猪むら

猟猪や義経千本ばたのもしき
業秋や提の外も猟法〳〵
篤秋や雑〳〵長き夕日かな

居　附る歟

出る月ぶ臥上ひりり小田の居
辛崎の行ゑもハゞゝ小田の居
鍬辞もへの字〳〵や小田の列
風雲を乗て雲ー居の列

初雁やまだ夫列も定ら次第
鶴鈴や江の系の原ふまぎれ出
暁の耳枕つゝぬくとうとう系
あく時も首伐処きあらうとう系

嵐ふくもまきてまおもなめうらぶ
山雀や尾上の松に揚る朝まつま
蕎麦さや 揚ふねのまる むく丹声

時分

吹まて仙禾やら赤一野分空
仮橋の心元なき 此の舟
蓮池ふ静るれぬる 秋ふうの舟
川ぬらて石を流る 時分うの蛇
雲きれて雨遠ひ来る野分うれ
ぬるめ

砧

宿人や振ふうて妙のまぬ
葉山子

陳の出るふハ律儀ふこうしぶ
念入まて見てもかしふ葉山子哉
動くとも石ぬる月夜のうしぶ

薬掘

名さや薬ほりみる
山伏も文ふて萄の根ふりうふ

枌

浴枌やう祝もうけぬ人心
甘干や破風の日むきふらる点

木の実附木の子

園栗や落て古寺ふる石の上
磨掘のうふ狩ふ猿の臭ふ

国立国会図書館　タイトル『蓁々翁句集』　請求記号 863-94
ガラス使用

團栗やあほきこゝ馬の耳
笑ひ割きて鬼の拳の招招ゝ
無花菓〳〵後牙似て招招ゝ
指ふせ梅ふ冷〳〵推の雨
蘭や人のまこゝ袖ふ又
松茸や笹ふいさゝ袖ふ
童部の力ありやや海贏廻し
海贏廻し
重陽附菊
人のこゝ牡菊ふ綿着せる昔
頭子多切禿〳〵や菊の宴
菊角力物ふ着〳〵ほれぬ

花筒多青きふ志ゝ今
九日いの一ふ偕ゝる小菊哉
松ゝ葉の籟ふ一二把黄菊哉
迫掬ふ来孫らわる黄菊哉
後の月
猩〳〵も冷て出ぬ杉後の月
芋の葉の笛も湿りり后の月
夜寒附水垂
裏不二ふ近き旅寐の杉多ふ
杉多ふや奥津ゝ海の涙の春
夜多きや思ひやらる不破の月
常釜の沙の止んて夜多ふ

国立国会図書館　タイトル『蓁々翁句集』　請求記号 863-94
ガラス使用

水哉や一夜小雨の降る秋　朱　示

麻

小男しうやきこのんでせをそろへ三声鳴

紅葉

殊更や紅葉小雨の時行くを

渡るもみぢや花のよし川

吹ちりてさらぬ岸も深る紅葉うす

宿ごとや岸も色ある紅葉うす

秋の暮

綱引きてまきくる秋の暮　秋の暮

秋の暮吟風の生も庚申哉

七秋

秋ぢくや朽の園子の沼ぶより

秋ぢくや朽ぢ尾花も老ぬよも

時雨も月おぼろ哉　秋の末

冬之部

初冬

初冬や矢ふ轉ま
ちるものもちらりてそしる
隊書りも笠神再ひ小春うふ
五種香の一と名殊凍や小春風
岩梅葉ふ手ふ女修ふ小春うふ

時雨

寺の門綿貴ひとも時雨うふ
為ひとる家鴨のさ声や初時雨
袈裟の僧拾ふ内も時雨ふ

是ひ

松蓋のい鉢ふ愛ふ 梅る

題安宅

関の松 時雨の楯と成ふりも
手形組てきけい止うり小松時雨
舟歌いまくて矢橋の時雨うふ

炉開

炉開やまと平蜘の足早き

芭蕉忌

潮こや笈ふ 時雨
女乃や行ゆく雪の枯尾花
松露の匂ふ像並て
時雨るや女松浦ふ 峠や 蓁々

雨ふるでも降ぬ時雨の傘
賛
旅ふ病て夢は枯野を廻るとも
芭蕉翁の高吟彷彿たり
行事もおくてゐるしぐれ 枯野うち
七福忌
焼香ふ頓てくゆりの香となり
會式
蒲団翁ふ仏法もつまりゐる會式うち
追悼
肩衣も夏羽織なりや 頸巾

さらさらと襟の時雨 野中井
日の中ふ野中ふ君ふ辛辣奴ふ
軽蔑ふ見ぎるうしさの野中うち
冬籠 附冬搏
篝虫と人ふ笑ひ捨
大寺や土手未積ふ上ゲ冬籠
冬籠
風やまぬ北刻今ふ古外套
木のうしや岩ふもたるる滝の糸
木枯や岩ふ志ふも風や滝のたくし
枯野 附冬田
上下坂

国立国会図書館　タイトル『蓁々翁句集』 請求記号 863-94
ガラス使用

田嵐残して枯野の鳥ゝ
枯野原子の日の小松見てわたる
芝赤仏と草の青きとの中枯野原
堀残為のたゝ〳〵冬田かな
磨ぬりの秋さびてゆく冬田ゝ
生海嵐附合
潺ゝもつゝくゝもつゝく生海嵐ゝ
引汐の岩ゟ岩へ生海嵐ゝ
浅漬ゟ塩くき酸っぱき若い元
六人立机
手ごゝろ〳〵花の咲こぼるゝ納豆ゝ
草木

吹き寄せて巴ゟ廻る落葉うゝ
隅の棚昼も稼ぐや冬木立
橋の落葉大根の葉ゟ青ゝ
橋よりも氣の重る棚の落葉ゟ
鬱ごする馬くびひねる落葉うゝ
落葉山兎の罠もあらはれて
日當りも能き畔乃や冬の草
吹落てさゝ伊ゟうれ尾花
山茶花やいつら咲ても伊達姿
誉よ茶ゟもゝまゝ
切株の一ゝ我小育ち根源ゟ
梅一輪冬も日向のよゝ

国立国会図書館　タイトル『蓁々翁句集』 請求記号 863-94
ガラス使用

冬の日
冬の日や腮杖つく市の奥
冬の月
夕凪の名ゐ荒くり冬の月
水鳥もさそむ初冬月頃る
大木の枝小さくなりり冬の月
椿
椿の火や伝水のつ下て十文字
水雪附晴
水雪の輪郭なき風の汀かな
水雪や水沢そ永日のあるそ
水雪や永の暮小立無よ

水雪や鳴るうれめる松籟の声
永雪や声や声や陰雪や羽根もひ
永雪や夏我旅ふ吳ふ吹
水雪や雪入江のの水雪し
晴の声水田のおそうきの先
うきおうう初雪ふ晴ふ
暖雪
綿我汗や声何ぬ光雪
子雪
小松子雪沖より風上げ
沖荒れて松小松雪
菜花畑雪月の出の雪の雪

蓁々翁不仰我仰さるる村雨哉

秋部

月影の雲欠ちらめく秋哉

雪

吹落て雪不留ゐる雪哉

思ひ切て矢ふ帯ゝ雪哉

鶏も後欠むかれて雪哉

雪の〻峠欠越る雪哉

油火の〻消〻る雪哉

木刀のさゝり折れて雪哉

氷附氷柱

時雨や鉋の抹よりも氷

行灯ト閑ゝ門田の氷哉

米粉〻氷ふ降〻り初氷

麻の葉の〻面向〻一ツ氷哉

細工ふ書ける〻ふ氷哉

霜

小鼓の皮も裂へき霜夜哉

張治ゝ火の衛ふ老ゆる霜夜哉

掃き寄せて箒ふ重ふ霜の花

初雪

初雪や障の行やふまでも

ゝ川辺や不仰の石の

雪

朱の百不栄湯も白
踏浄き京暗き見
川の影の葉屑小白
雪のなやらぬ水車
積る雪雲吐く山も
色ひるく往来
雪晴やいつもうす
餅搗や崖も見
雪の和や椿横
風呂の灯ほそ細
ちらし日ますまで
尾根もいつぶも
雪の朝

立場ふもうこんか
荘厳ふ沈も
雪まみや面
吹雪附
無垢のまま百
汗部屋
吹ふぶく
雪車附
名さや雪車引く
橇や孫ふ
師走

日の処ひ

国立国会図書館　タイトル『蓁々翁句集』　請求記号 863-94

ガラス使用

煤掃

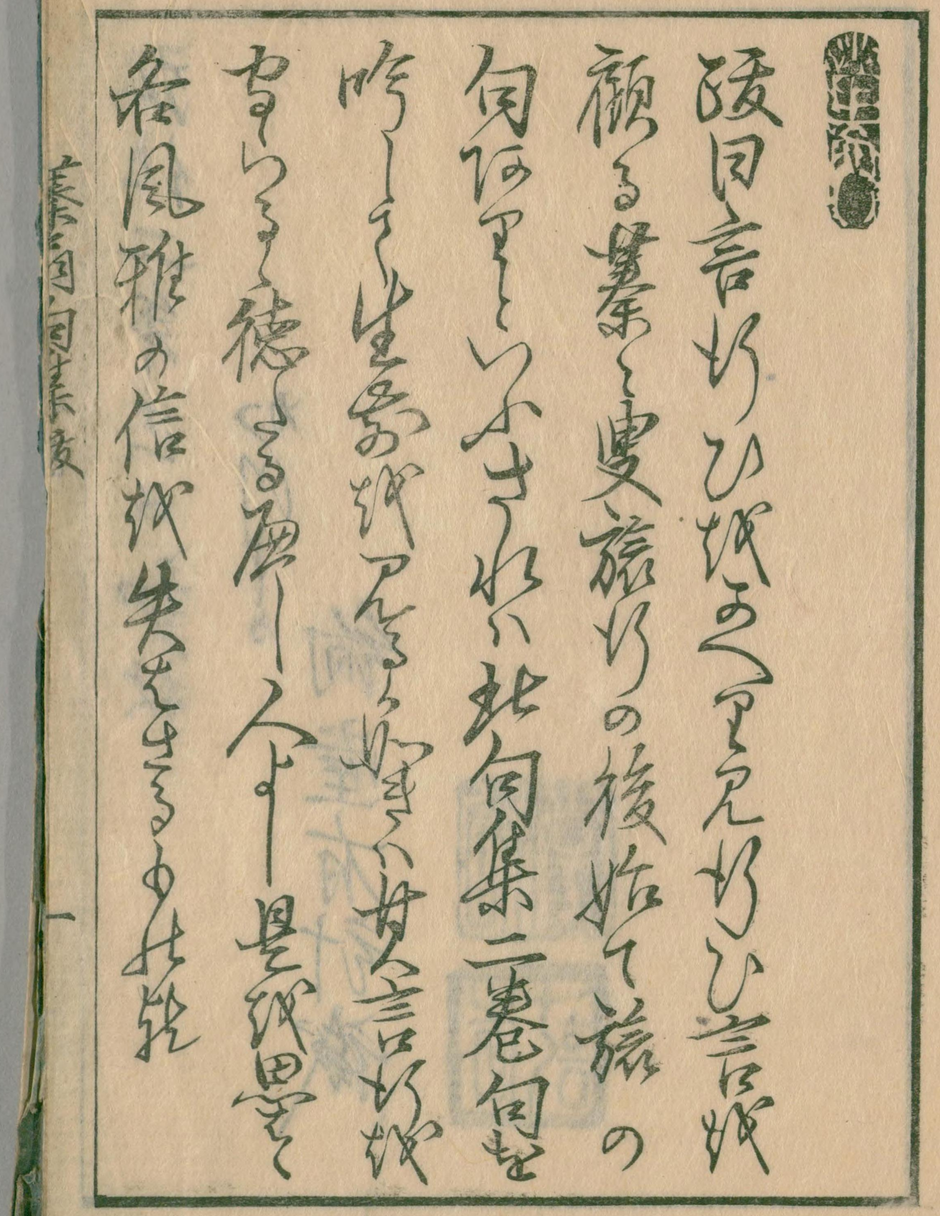
煤掃や銀屏の蜂の巣のちりも
大仏小階子ひらり　煤掃

歲暮

聖ありし人いまそかりや年の暮
好く年や等の吉もも通ふ次
暁もなのめならぬ海の音
遥〳〵き掏り巻やら鬼やらひ
亘寿や思ひ切る長廊下
年の市見わたす佛具もうれふり
る附けも夥ひめそかまり杭
儀二〳〵奥る年の湊う粒

年の尾や王子の狐見にうん

国立国会図書館　タイトル『蓁々翁句集』　請求記号 863-94
ガラス使用



陵日言好ひ妓よ兄好ひ言妓
顧る業こ婁旅りの後始て旅の
句仙ひとつおきれ北句集二巻句を
吟こと生家妓ひとつ母こ言好妓
寄らこと徳こる原一人ぞ一星河星て
各風雅の信妓失ぞ

国立国会図書館　タイトル『蓁々翁句集』　請求記号 863-94

ガラス使用

863
94

14156

弘化二年己未初秋

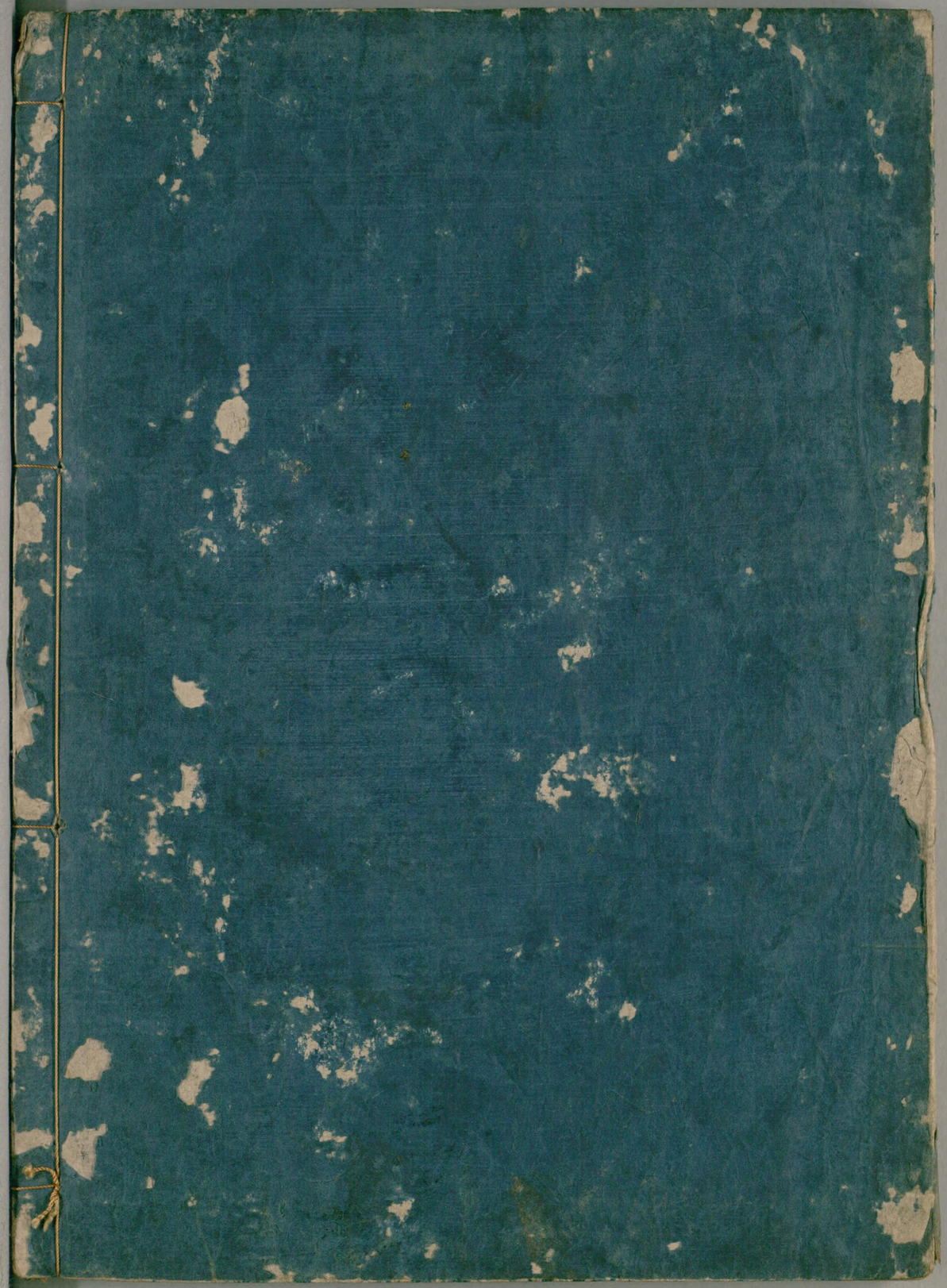
[illegible]

絢堂有計識

1.00

国立国会図書館　タイトル『蓁々翁句集』　請求記号 863-94

ガラス使用



国立国会図書館　　タイトル『蓁々翁句集』　請求記号 863-94

ガラス使用